

山内清男と先史考古学・人類学

中 村 五 郎

はじめに

主題に入る前に、山内の誕生地の谷中清水町と上野新坂貝塚の話をする。東大キャンパス西側の本郷通りで交番のある四ツ角を東に折れ、坂を下ると根津交差点。其処を直進し、やがて、道の南側が幕末まで火除け地で、明治に宅地化して旧称が谷中清水町、現町名は池之端で山内の誕生地（小森隆吉著「台東下谷町名散歩」（平成3年）小森は滝口宏に師事）。隅田川の言問橋が同街道の終点。上野山を寛永寺坂で下り、次のT字路交差点が上野新坂の坂下、坂上に鶯谷駅の上野寄り出口。戦前は街道に商店が並び、奥が住宅群、坂下交差点の西南の一角に我が家が含まれ。線路脇目標の焼夷弾投下で街道南側の上野桜木町と山上の徳川將軍家御霊屋等が焼失。戦後の区画整理で上野桜木町の坂下部分を根岸に統合し街道両側が根岸。上野新坂貝塚は古くから有名だが、貝塚を知る人は居らず、戦争激化・疎開ですべて有耶無耶。

幸運に八十路も半ば過ぎに同貝塚の記録と出逢う。大震災直前発行の「人誌（人類学会報告、東京人類学会報告、同学会雑誌、人類学雑誌を人誌と略記）」38巻5号、有坂鉛蔵「日本考古学懐旧談」186頁以下に「明治16年7月、上野山の断崖下、上野公園北東隅の地下1米位に貝殻あり」終末期近い弥生土器の甕の口頸部破片の写真も掲載。小森の著書に、明治16年7月28日に上野駅開業、当初の営業区間は上野～熊谷間。駅舎の場所はかつて寛永寺の支院群が軒を連ね。上野の呼称は寛永寺創建以降、同寺関係地の総称で山麓の寺域も含む。明治初めに寺域の一部を割き上野公園を設けた。駅構内で北東方向の線路は、最初のカーブで進路は北西方向、そこで上野新坂貝塚を発見。昭和18年頃の科学博物館で展示の原色パネルに、崖下の工事現場で貝塚発掘の光景を描く。同館に同貝塚の資料を保存の筈？ 懐旧談で有坂は重要な指摘を行う。上野新坂貝塚発見の翌17年3月に本郷弥生町遺跡で有坂が土器を発見。彼は前年に上野新坂貝塚発見の土器と同種と気付くが、その説明も省き、弥生町遺跡の壺を坪井に預けて、有坂は外国留学に出発。のち、有坂には何の連絡もなく、弥生町遺跡の壺を「最初の弥生式土器の壺」と坪井が雑誌発表。坪井没後の「日本考古学懐旧談」で、有坂は始めて顛末を披露。モースは明治10年に車窓で大森貝塚に気付き発掘し縄紋土器を報じ。16年に、モースと近い有坂が上野新坂貝塚で新種の土器を報告した。明治29年、現在の巣鴨駅の南東の（旧旗本）蒔田鎗次郎邸内でのゴミ穴掘りで弥生式土器9個体を発見し、学界の注目を集め、弥生式文化の議論も一気に盛りあがった。のち岡本勇も「縄文と弥生」（平成10年）で当時の事情を紹介、また、彼は同書で明治以降の人種論の動向を論じた。

別に農具として、石器を論じた神田孝平、NGマンローの業績も忘れられない。

本郷弥生町遺跡に関連し、昭和49年に早稲田大学の久保哲三が東大考古学研究室を訪問し、東大構内で小学生が遺物採集の情報を伝え、翌50年に東大は発掘調査し、佐藤達夫が速報。佐藤は間もなく病没、速報3編は佐藤「日本の先史文化」（昭和53年）に収録する。

モースとモンテリウス

E. S. モース (1838・天保9年～1925・大正14年) は米国人の動物学者、貝類の調査目的で明治10年に来日し、大森貝塚を発掘・報告し、日本の近代的な考古学の先駆者となる。東大の依頼で動物学講義の為に一旦帰国し、翌11年に東大で動物学の講義を行う。彼はわが国へ進化論を伝え、日本の近代化の促進に果たした実績は高く評価される。大森貝塚の発掘資料を中核に東大人類学教室が誕生し、そこから山内は巣立ち、日本の先史考古学研究に一生を捧げた。

O. モンテリウス (1861・文久元年～1921・大正10年) はスウェーデンの考古学研究者で、「オリエントとヨーロッパの古代文化」(ドイツ語)の第1冊「考古学研究法」(1903・明治36年)を刊行。同第2冊「バビロン・エラム・アッシリア」(1923・大正12年)は著者没後刊行。後年、第1冊「考古学研究法」(昭和7年)を濱田耕作が邦訳し刊行。鳥居龍蔵の勧めで大正8年7月に山内は人類学教室選科入学。だが、入学時に鳥居は東シベリア各地の博物館を歴訪中、同地で偶然「考古学研究法」を入手し帰国。当時、山内は田中美知太郎ら読書会との関係で、ドイツ語文献速読術を習得中で、早速、鳥居が持ち帰った同書を読破した。「考古学研究法」は各種青銅器につき、イタリア等の製品と北欧製品の双方を図示・比較。「考古学研究法」では、発見が稀な地元北欧の先史土器は全く素通りをして、イタリア製土器のみを図示する。日本の先史考古学の研究対象は地元の縄紋土器主体で、山内は彼私の主要な研究対象の遺物の違いにまず気づき、最初から考えあぐねたであろう。

ここで南欧・中近東などの先進地域と北欧との経済的な結び付きを簡単に触れる。北欧の先史時代遺跡での南欧製品等の豊富な発見の背景には、古くから北欧産の多量の狩猟・漁撈産品が、周辺地域を介して南欧まで輸出され、時代が降ると鉄材の供給もそれに加わる。同時に北欧は、南欧の先進技術の製品を入手する経済関係が長期間存続した。従って、北欧を後進地域と単純には割り切れず、モンテリウスは南欧産品も視野に入れて、北欧の先史時代遺物の編年網を逸早く構築し、編年網を中東まで広げる意図を示し世界した。

日本の先史時代・歴史時代と鳥居・喜田・柳田

ヨーロッパを始め世界各地は広く西暦が普及し、各地域の「歴史のあけぼの」も具体的に西暦での記載が常道である。日本では歴史の始まりを「古事記」・「日本書紀」の記述で考える。その事情を踏まえて、水戸出身の日本史研究者で、明治始めに奈良県石上神宮の大宮司を勤めた菅政友が「古事記年紀考」(明治24年)で「古事記」に崩御の年・干支を記載の10代の天皇に注目して研究し、最古の崇神天皇崩御の戊寅年は中国蜀の景耀元年に当たると報告(西暦258年)。同年以降が日本の歴史時代となる。ただし、考古学では考古資料を根拠に年代を把握するので、特別な配慮が必要である。

その事情を踏まえて、喜田貞吉が梅原末治との共同作業で、「歴史地理研究」24巻5号「古墳墓年代の研究(中)」(大正3年)で、奈良県箸墓古墳の造営年代を崇神天皇崩御よりやや遡る魏の正始9年頃(西暦248年頃)と報告した。言うまでもなく先史時代は縄紋・弥生両文化、歴史時代は古墳文化から。同古墳は全長約270メートルの前方後円墳、歴史時代への移行期の目安にふさわしい。

【鳥居龍蔵・喜田貞吉・柳田国男】ここで、研究対象の基本に拘わった喜田・柳田、さらに喜田の同郷で彼より1歳年長の鳥居を加えた3人を紹介する。

鳥居は明治3年生まれで徳島市の商家の出、喜田は1歳年少で徳島県の農家の生まれ。鳥居・喜田の2人の教育

も対照的で、1年先輩の鳥居は尋常小学校を2年生で中退し、以後は自習。東大人類学教室標本整理係に就職し、各教授の講義を聴講して習得。他方、喜田は学齢前から小学校に、中学・旧制第3高校、東大、大学院満期除名、期間・内容ともに対象的に2人の学歴は異なる。その彼らの研究の出発点も、鳥居が東アジア各地で土着民を実地で観察した研究。他方、喜田は文部省で教科書の編纂の傍ら、歴史地理研究の月刊誌を編集し研究の中核的地位を確立。だが、喜田は教科書への関係官庁の点検洩れに気付かず、教科書の南北朝の記述が国会論争を惹起し、43年末、文部省を退き京大講師。後年刊行の「還暦記念六十年の回顧」で「当初、伊藤博文公爵にうかがいすれば、真相を知り得たかもしれぬ」と。恐らく柳田国男が喜田に注意を喚起、柳田・喜田の仲介者は澤柳政太郎と筆者は推測する。澤柳は慶応元年生まれ、東大哲学科卒、文部省で文部次官のち京大総長、ともに喜田の上司。柳田の旧姓は松岡、明治8年兵庫県生まれ、東大法科卒で官吏、貴族院書記官長で退職。民俗学の創始者。柳田家に婿入り、義父は大審院判事。柳田家は旧飯田藩士、澤柳家は旧松本藩士、長野県人で縁戚関係にあり。澤柳は退官後、東京世田谷で創立の私立成城小学校を大学にまで発展させた。柳田は澤柳の事業に期待し、彼自身が成城に転居、子息の同校進学など、終生、同校を応援。柳田の逝去直前のNHKの番組「此処に鐘が鳴る」で、梅原末治が考古学関係者代表で柳田に謝意を表し、喜田の代理を果たす。山内の成城大学勤務にも彼が関与。

柳田・喜田関係では、柳田が創刊の「郷土研究」に喜田が「本邦に於ける一種の古代文明」（大正2年）を寄稿。翌年に喜田が『歴史地理研究』発表の論文中の奈良県箸墓古墳に関係し、柳田は皇室が慶応年間に同古墳の祭祀を開始し顕彰は妥当と伝えたかと推測する。

〔喜田貞吉の東北大講師就任〕喜田は京大で10年ほど活躍し、山内が大正13年に解剖学教室の副手に就任の頃、喜田も東北大で講義を開始し、北日本と周辺各地の、民族・考古・歴史・風俗等々各種の資料の収集も開始した。突然、彼が東北大講師で教鞭をとる決断の理由は、京大で囑託の梅原に欧米留学を決断させ、留学中に喜田が東北大で諸準備をし、留学後の梅原を東北大に迎える計画を立案、実行する。だが梅原は留学先の欧米で有名となる予想外の展開から、帰国後は京大教官に迎えられ、東北大就職は立ち消え。

梅原がヨーロッパで活躍開始の頃に、柳田は雑誌「民族」を発刊、喜田は同誌1巻2号（大正15年）に「奥羽地方のアイヌ族の大陸交通は既に先秦時代にあるか」を、2巻2号（昭和2年）にも「奥羽北部の石器時代文化に於ける古代支那文化の影響に就いて」を発表。前者で青森県宇鉄発見の石刀の柄頭に縄紋晩期土器の文様の図柄や、後者の同県小川原沼沿岸の同期の遺跡発見の縄紋晩期の壺の底部が袋状三脚一高底に類似から、縄紋晩期の本州北端の両遺跡の土器・石器に中国文化の影響が及んだと推測する状況があった。大正3年に喜田・梅原が箸墓古墳を目安に古墳時代の始まりを明確にした影響で、大陸と西日本各地との弥生時代の交渉も妥当と理解され、大正末には東北大の講義で、喜田自身も古墳時代以前の大陸から西日本経由で北日本への経済的交流を論じていた。

喜田の学生の伊東信雄は、その後、母校で教鞭を取り、東北大学の退官時の講義で、往時、清野が雑誌「民族」2巻6号に発表の「日本石器時代に関する考説」（昭和2年）に触れ、論文の前半でシベリア方面の先史遺跡の土器を紹介するが、一世紀近く過ぎた現在でも、いまだに同方面と日本列島との先史土器の関連の手がかりはない。大阪国府遺跡の議論で、直前、鳥居との論争に敗れた濱田は、スウェーデン皇太子の来日時に同行チームへ日本考古学を講義し、往時の自説の日本先史土器の変遷を強調して、皇太子訪日記念の「極東古代文化博物館紀要第4巻」（昭和7年）の日本先史考古学の論文は濱田の論旨を採用し折角の紙面を汚した。

なお、伊東自身も南樺太の先史時代遺跡を踏査したが、当時、調査遺跡の多くは日本の古墳時代かそれ以降で、古い時期の遺跡とは遭遇しなかった。なお、清野は最後の1頁で、中国などから古い時代に西日本との交易があり、当然、西日本経由で北海道へ交易品が齎されていた。北海道への交易は間宮海峡経由よりも西日本経由が重大

で頻繁であったことは諸事実が立証と結んだ。

大正3年に喜田らが古墳時代開始は奈良県箸墓古墳と指摘し、西日本での古墳時代以前の研究が、一挙に加速した成果を忘れられない。

東大人類学教室と坪井正五郎

我が国の先史時代の研究史は明治10年のモースの大森貝塚発掘資料で始まる。鳥居は「ある老学徒の手記」の「はしがき」で「太政官規定で東大理科大学人類学教室へ石器時代・古墳時代の遺物（陵墓に関するものは除いて）を納入のきまりが、三宅米吉と坪井正五郎の相談で変わった」（昭和28年刊）と記した。斎藤忠「考古学史の人々」（昭和60年刊）154頁以下に、三宅・坪井両博士が関係の明治32年の内務省訓令を収録。人類学教室と石器時代の関係は教室発足時から明確で、「日本石器時代遺物発見地名表」の刊行も明治30年に始まる。

坪井は東大動物学科を19年卒業、21年に理科大学助手、翌22年から英国に留学。当時の状況を山内は論文集新5集の「鳥居博士と明治考古学秘史」で詳しく紹介し、坪井はモースの研究に冷淡で、一時期、考古学研究は盛んだが31年に一転伏流と山内はいう。

東京大学理科大学人類学研究室に明治22年に若林勝邦が就職し、23年に技手、26年に助手と昇格。彼はモース以来の考古資料を管理し、各地の新資料も増加する。若林の口添えで24年に八木柴三郎が標本取扱で教室に就職。若林は28年7月に宮内省帝国博物館技手務に転じ、人類学研究室・博物館双方に22～36年勤務。遺物保存の先駆者として全国に出張、各地で研究者を育てた。彼は人類学会創立以来の会員で同会の会務を十余年間掌握し、37年1月まで同会幹事。清貧の彼は同年12月に44歳で逝去。

坪井は25年に帰国し人類学講座の活動を開始する。人類学教室発足時に特別の財源があったか、帰国直後の坪井の西ヶ原貝塚発掘に始まり30年秋までに関東各地の貝塚を中心に亀ヶ岡遺跡を含む25遺跡を発掘し、教室の10名で手分けして発掘成果を「人誌」に発表した。

28年に偶然、三宅が帝室博物館に若林を迎え、その後の考古学会創立に、八木・下村三四吉・佐藤伝蔵ら人類学教室関係者も参加し、新学会の研究層の充実を図った。30年秋までの参加者で人類学教室から鳥居・野中完一・山崎直方。内山九三郎・林若吉は研究者に成長せず。八木はのち35年に台湾総督府に転職。その後一時帰国して活躍、さらにソウル・大連に活躍の場を移すも、昭和11年帰京し17年逝去。明治31年に佐藤が東京高等師範へ、人類学教室選科出の下村が東京女子高等師範へ転職し、両者の転職を山内は注目する（新5集218頁）。

明治26年、文部大臣井上毅がペスタロッチ教育の東京高等師範学校校長高嶺秀夫を突然罷免し、高嶺は帝国博物館理事兼部長に転職する。30年、文部大臣に就任の濱尾新は高嶺を東京女子高等師範学校校長に任命、博物館兼務とする。前記した31年の佐藤・下村の人事も高嶺の人事と一連か。帝国博物館長の九鬼隆一は慶応義塾の出身、高嶺は義塾の後輩で、九鬼の推薦で米国留学。東大で動物学の初講義のモースと、留学から帰国の高嶺とが11年早春の太平洋航路で偶然同船。高嶺はモース運営の米国セーラムの夏季海棲生物講習を、彼不在の前年に受講し、それを知りモースは、高嶺に東大動物学教室の低学年生への講義の分担を要請。高嶺は応諾し授業を分担。モースは高学年生への講義に専念する。

明治37年、東京人類学会創立20周年記念の「人誌」224号に濱尾の談話を収録する。話は3部に別れ、冒頭で学会20年間の蓄積で、考古学も今後は地域ごとに考古・典籍・近世・寺社等の教育が望まれ。人類学も言語・社会・史学や解剖・生理との関連を期待。最後に、坪井がモースを話題に大森貝塚も重要だが、シーボルトから論ずべし等々、濱尾は重要な指摘を行う。だが、坪井の反応は皆無で、学生育成の意欲さえ疑問視される。坪井は明治26年に人類学教授に就任。だが昭和13年まで約40年間の教室の卒業生は皆無で、人々は口を噤むが異常は明らか。ただ

口を噤んだ後継の鳥居は坪井の没後に改善を試みた、選科生の山内の処遇がその一例であろう。

なお、「人誌」同号119頁の野中の千葉県堀之内貝塚報文は「土器は全体的に粗大、文様も同様、椎塚貝塚・大森貝塚のような薄手・堅緻なる風でもない。椎塚風に少し粗糙を加えたるもの」と興味深い報告で、鳥居の堀之内土器提唱の先駆的業績であろう。その鳥居も大正13年に人類学教室助教授を辞職。

大正2年5月、坪井はロシアでの学会中に発病して逝去、彼の他界を人々は悼んだ。他方、「人誌」28巻11号の追悼文で八木の「坪井博士の美點と欠點」に「坪井は博士論文を提出せず理学博士に（略）大なる事柄に不得手の傾向ありしは明らかなり」とあり、坪井は込み入った案件が苦手で極力取組を避け無視し続けた。人類学科不成功の理由は勿論、人類学科への社会の期待・要望さえ、肝心の本人自身が無関心。濱尾の談話への対応は皆無。濱尾の建設的な助言の主旨も、坪井の理解をはるかに越えた話題であったのだろう。残念。

大阪国府遺跡と大正前半の関東・関西の考古学

大森貝塚で始まる明治期の関東中心の先史考古学を述べて来た。大正初めに創立の京大考古学教室は初代教授濱田の留学先から帰国を待たずに講義を開始する。その頃に大阪府国府遺跡が学界で話題となった。

鳥居は「大和を中心とした有史以前」（「ある老学徒の手記」のうち）の冒頭で「本山彦一が大正の初め頃に坪井正五郎に、近畿地方の石器時代の原稿の寄稿を求めたが、畿内にはほとんど同時代の存在なしと新聞に記載」とある。本山から鳥居への要請で、6年春に鳥居は人類学教室所蔵の関西の石器時代の遺物を悉皆調査し、7月下旬に関西へ乗り込み各地の遺跡を訪問、関東と同様に関西でも縄紋土器・弥生式土器の存在は明らかと主張する。他方、京大の濱田らは縄紋土器・弥生式土器の同時並存を主張して対立するも、結局、京大の両土器並存説は否定された。

明治に発足の東大人類学教室の坪井が、考古学への拒絶反応を持続した。同様に、京大でも前述の澤柳が教授罷免事件で早々に総長を退任、類似の動向を抱えていた。

京都は江戸時代から伝統的に東アジア各地と長期間の外交交流の伝統があり、東アジア各地の諸情報に加えて、明治以降は西日本各地の考古学の情報も、京都で肌目細かく集積されていた。京都で育った特異な人材の好例が梅原末治で、彼は東洋史の内藤虎次郎（湖南）、中国金石学の富岡謙蔵両先生と特に親しく、考古学教授の濱田とはさほど密接ではなかった。勤務の約10年間は、1年のみ助手、それ以外は濱田の囑託であった。だが彼の日本は勿論、中国・朝鮮半島の膨大な最新考古学情報の集積の結果、欧州に到着して、集積した情報の一部の紹介にも拘わらず、老練の東アジア考古学者の盛名を實力で獲得。彼に対比しうる研究者は東日本には見当たらない。

他方で、当時は京大の長谷部は、東大解剖出身で国府遺跡を発端に東西日本の遺跡の状況の相違に気付く。国府遺跡の出土人骨でも伴出の土器破片が無ければ、躊躇せずに時期不明と割り切って報告し、研究の正道を構築する。長谷部を東大で指導した小金井は抜歯の習俗に注目し研究・報告する。東大人類の鳥居は関西の土器編年の細別を模索する等々、関西での知見に基き東日本の研究者の研究に新展開があり、新進の山内も戦列に加わる。

山内と人類学

〔鳥居の人体計測〕明治から大正への移行期、坪井の他界前後の数年間、鳥居は朝鮮総督の指示で、総督府囑託として朝鮮半島全域で古蹟調査・石器時代調査・人体計測の3項目の調査を実施した。人体計測は半島各地で1カ所男女各10人の同一年令者を計測・撮影し、明治43年の第1回調査から大正5年の第6回調査で完了。第1回調査は咸鏡南北道。45年の第2回調査に人体計測の記事なし。大正2年の第3回調査は慶尚南北道・全羅南北道、多島海の諸島嶼と済州島。同3年の第4回調査は忠清南北道と江原道。同4年の第5回調査は黄海道・平安南道、慶尚

南北道の残りとも鬱陵島も調査。同年の平壤付近、大同江畔で多くの古墳を知り、鳥居は楽浪郡の漢族の墳墓と『史学雑誌』に投稿するも掲載拒否で没。当時の通説は高句麗の墳墓の見解。実際に同墳墓を発掘すると漢代の楽浪郡の古墳は明白。だが、発掘が始まると今度は発掘隊から鳥居を排除。同5年の第6回調査は平安北道と鴨緑江口付近、さらに釜山半島の調査で調査は終了。第2回調査以降、澤俊一が助手・写真撮影で援助。

山内は後年の「長野県諏訪郡の住民の人類学Ⅰ」第1章調査の報告の末尾で、鳥居の朝鮮でのこの長期的な調査の膨大な測定用紙・写真を特別の好意で常に拝見し、この大正11年の諏訪郡の調査でも鳥居の調査方法に従う場合が多いと謝辞を述べた。

〔諏訪史編纂と人体計測〕 諏訪史編纂は地元でまず計画が生まれ、大正7年に企画は鳥居に持ち込まれ、鳥居が加わり翌8年に事業を開始した。

〔諏訪郡壮丁人躰測定の結果〕 「信濃教育」426号（大正11年）に信濃教育会諏訪部会を報告者に同10年分の報告を掲載、諏訪史編纂からの派生の企画は明らか。だが「序」に「松村瞭氏が東洋学芸雑誌に日本人男女の頭形に關係する調査に触れ云々」さらに「偶々本郡出身現在東京帝国大学学生八幡氏の紹介で、S、Y氏にも来て貰う事となり非常に力強く感じた。然しその後同氏は止むを得ぬ事情の為に来られない事となったが、最初の計画通り（中村追記一郡内の関係者のみで）測定・報告」とあり、10・11両年の壮丁人躰測定・報告と諏訪史刊行は直接の關係はない。10年分の同論文複写は中沢道彦氏の配慮で入手し検討できた、御好意を深謝する。

〔山内・平沼の「長野県諏訪郡の住民の人類学Ⅰ」〕 山内は大正11年に卒業論文「人類の遺伝学—ゼネティックス」を提出。同年4・5月に長野県諏訪郡の壮丁測定を実施し、翌12年「信濃教育」440号に「長野県諏訪郡の住民の人類学Ⅰ」を平沼大三郎と共著で発表した。

最初に山内から私が諏訪郡壮丁測定の話を押聴したのは昭和30年代であろう。第2次大戦以前から折々の徴兵検査の情報を私は記憶に留めていた。それと対比し、山内が現地での測定作業。その後、東京の一年志願兵での入営、そして大半を衛戍病院で壮丁測定記録の整理・分析の作業を行うとの説明で、私は異例と直感。戦後2回の回想で親友田中も、病氣除隊に訂正かと推測する。鳥居の朝鮮の調査時の二代の総督はともに軍人、個人的なつながりであろう。山内の調査に、鳥居が自己の人脈で、山内の東京の諸作業に特段の配慮を要請し。本人が入営し、病院に移って作業を消化したかと推測する。

山内の11年の調査は9日間に本人・友人それに信濃教育会委員1名の計3名で、諏訪郡の兵隊検査千余人を測定し、山内が資料を集約・分析した。12年刊行の論文複写は齋藤隆氏の高配で入手した御好意を深謝する。

山内の講義を受講の山口敏が、後年、12年刊行「信濃教育」の報文を一読し「当初の人類学・遺伝学と先史学とを両立させ、思い通りに研究させれば、日本の人類学も大分変わったかも知れぬ惜しい残念」との読後感を寄せられた。

スウェーデン皇太子の来訪と東大・京大

坪井の没後、東大人類学教室が話題となる機会は少なかったが、考古学の造詣が深いスウェーデン皇太子訪日計画が伝わると状況は一変する。皇太子が考古学でも具体的にどの方面に興味をお持ちかも把握せず、東大は人骨発見で姥山貝塚へ皇太子をご案内。京大は慶州駅工事で偶然発見の瑞鳳塚古墳に皇太子・同妃殿下ともに大変に気に入られたと判明。そして、大正天皇の諒闇以前に、皇太子夫妻は中国へ出国。大正15年12月25日に大正天皇崩御。数日が過ぎてすぐ昭和2年元旦。

スウェーデン皇太子訪日記念の「極東古代文化博物館紀要第4巻」は昭和7年刊行。しかも、同書の日本考古学

の論旨は、国府遺跡の土器編年論争で敗れた京大説を踏襲し、刊行時すでに「無用の長物」。

偶然、「関東・関西の考古学」で登場の梅原が、皇太子訪日と同年の春にヨーロッパの留学を開始。京大の一介の嘱託がパリーでの初講演の途端に、老練の東アジア考古学者の盛名を獲得。世界と日本の落差が、何故大森貝塚発掘後、半世紀の日本で出現したか、暫く梅原の足跡を追うこととする。

〔梅原末治の欧米留学〕 皇太子訪日のほぼ1年前、梅原末治は大正15年の新年をインド洋上で迎えた。「大正前半の関東・関西の考古学」で、京大考古学教室で嘱託に甘んじ10年間勤務と彼を紹介した。篤志の人々の寄付で、ロンドンの大英博物館で15年春から研究開始の予定。パリーに途中立ち寄り、出迎えた松本信広（柳田の民俗学研究に関係し、慶応大学考古学教授）に、梅原は持参の平壤近く楽浪の多くの漢族の古墳で発見の遺構・遺物の写真多数を見せ、松本は一見して興味深い資料で、早速、ソルボンヌで楽浪の資料の講演を勧め、松本の通訳で実現。講演後、フランスの考古学研究者達は梅原のパリーでの研究を強く勧誘、大英博物館のキャンセルまで要請も。だが、梅原は3月にロンドン入りを果たす。

同年夏にケンブリッジ大学のミンス教授の仲介で、偶然、今度は革命後のロシア考古学の重鎮オルデンプルクに引き合わされ。先方からロシア入りを強く勧められ、大正15年に諸準備を行い、翌年（昭和2年秋）にロシア入りが実現。ロシアの学会も楽浪の情報は興味を示し、未発表の外蒙古のノイン・ウラ遺跡の遺物の写真を撮り、後年、日本で同遺跡の報告書を刊行する。

梅原のロシア入りにはスウェーデン、ストックホルムでの入国査証の手続きが必要で、ストックホルム入りし、博物館で展示物を熱心に観察の梅原の写真入り新聞記事。今度は王宮から正式晩餐会に招待、同国の代表的な考古学者アンダーソンの隣席。晩餐会ではアンダーソンへの乾杯に続き、皇太子が梅原へも乾杯の音頭で恐縮する。アンダーソンは地質学者で大正8年に中国の新石器時代の彩陶の有名な遺跡をまず発掘し、同国各地で新石器時代から金石併用時代の多くの遺跡を調べ、各々の編年位置を推測し、さらに周口店の旧石器時代の遺跡を調べ、アジア各地の幅広い年代の各期の遺跡と中国の各期の遺跡との年代についての研究にも先鞭を付けた研究者である。当日は皇太子・同妃殿下の日本旅行の話など、ロシア入りの前日に参上の際には中国の古鏡多数採拓と実測、拓本をとる際に、一々銘の読み方を確かめ、いろいろ質問されたとある。つまり、皇太子は当時、中国の古鏡に大変興味を抱かれておられた。

その後も梅原は欧米で研修を続け、昭和4年4月に梅原は帰国し、内藤から東方文化学園研究所研究員の辞令を受け、京大考古学教室講師の辞令も受けて、離国時に予定の梅原の東北大学勤務は実現しなかった。

山内との関係で、昭和34年以降の成城大学勤務、37年の山内への京大の文学博士の学位授与の双方に梅原の協力は大きい。

仙台での山内、伊東信雄の情報から

加曾利貝塚の発掘で、山内は加曾利E式土器、同B式土器の時期区分を発表し、考古学界へ新風となり、急遽、山内が長谷部教授の東北大解剖学教室へ就職が決まる。

その直後の状況は「山内清男の考古学」の拙稿の「加曾利B・E両式土器の提唱」で要点を紹介した。

大洞貝塚等の長谷部主体の東北各地の諸調査が軌道に乗るかと期待された。だが、昭和2年から長谷部は人類学研究で南洋群島への長期出張により、考古学調査は棚上げ。山内は解剖助手の仕事で出勤。考古学は私費の日曜考古学と激変し、口が堅い山内だから、考古学情報が他に洩れぬ状況が続く。

伊東信雄は仙台藩士の子孫だが、少年期を父親の勤務地の北海道・千葉で過ごした。そして偶然、第2高等学校

生で仙台に戻り、昭和2年9月に山内の大木貝塚の発掘に初めて参加、それ以後、山内の発掘に協力。翌3年春に伊東は東北大に進学し喜田の指導も受ける。後年、伊東は喜田追悼論文集に樺太の先史土器を報告。伊東は前記したように、母校の旧制2高・東北大の教授を歴任し昭和62年逝去。やがて山内の発掘に、2高で伊東の後輩の齊藤忠も参加し、孤独な作業に変化が始まり、特に山内の記録で抜けた情報を伊東らの記録で把握できる。

山内が古式縄紋土器に初めて出会うのは昭和2年10月、宮城県柴田町槻木貝塚でこの時は繊維土器と混在し、昭和4年春の第2回目の発掘で繊維土器の下層で古式縄紋土器のみを発見し、時期も確信する。同年の夏に伊東は北海道函館の住吉町遺跡の土器と槻木貝塚下層の土器との共通の特徴に気が付き同年9月に住吉町遺跡を山内・伊東で発掘し、縄紋のない尖底の土器のみを発見し、平底・丸底の縄紋土器の以前にそれら土器を使った時代の存在を知った（伊東「東北古代文化の研究」『東北考古学の諸問題』昭和51年）。

山内は昭和4年に最初の先史土器編年表の私案を作り少数の友人に配布。伊東は同編年表を「山内博士東北縄文土器編年の成立過程（『考古学研究』24巻3・4号、昭和52年）で紹介し、山内の仙台時代の縄文土器編年研究の歩みを紹介した。同編年表は「画龍点睛」（平成8年）の巻頭図版3に本人自筆の表を収録した。

また「仙台郷土研究」復刊6巻2号の伊東の「回想仙台の考古学」の中の「縄文施文法の発見」を同書14頁に要略すると「耳鼻科などで使う綿棒をゴム粘土の上で回転させたら縄文に似たような文様になる（略）窓のカーテンの房の紐を転がすと縄文と全く同じものができた。それから麻を買って一生懸命にいろいろな縄をこしらえてゴム粘土上で転がして、縄文の違いはみな縄の撚りかたの違いによると解った。以下略。」なお、藤本弥城の高教では某氏の「石器と土器」での喫茶店で窓のヒモの回転は伝説。山内も昭和5年の「斜行縄文云々」の頃は油粘土の上で何でも転がし、また、土器破片を粘土に押し付けたとの逸話を教えられた。

【人類学教室の軌道修正を目指して】山内らの行動は基本的に東大人類学教室が正規の卒業生を社会に送り出すことで、加曾利貝塚での加曾利E式、同B式の提唱などまさにその一歩である。仙台時代の最後に山内は雑誌ドルメンに「日本遠古之文化」の発表を始め（昭和7年）、翌年、帰京を果たし連載も終え、8年11月から原始文化研究会（不定期）の集会を始めて11年12月17日の集会で、それ以降は会名を先史考古学会と変更。12年早々に雑誌「先史考古学」第1号から第3号を刊行し以後休刊。加曾利の仲間の甲野勇は10年5月に「関東地方に於ける縄紋式土器文化の変遷」を「史前学雑誌」7巻3号に発表。八幡一郎は同年11月の東京人類学会創立50年記念論文集に「日本石器時代文化」を発表し、奇しくも先史時代の3研究者の論考が出揃った。11年2月には甲野が雑誌「ミネルヴァ」を創刊し、短期間だが多くの話題の記事を掲載した。

実は、11年5月に突然、東大人類学教室の松村が他界し、人類学教室の重大な課題の、積年の学生不在からの脱却が突然、急務として持ち上がった。12年初頭刊行の雑誌「先史考古学」1・2号で山内は日本列島の土器編年と日本先史時代の抜歯の風習の変遷を論じた。いずれも日本先史考古学の高い研究成果であり、文部省での東大人類学講座の開設が承認され、13年には人類学教室の教授に長谷部が発令され、14年に人類学教室の初めての学生募集。

さて、この動きの前後の考古学界を俯瞰すると、山内ら先史考古学の3名に対し、批判的な3グループが目につく、第1は濱田・清野らの京大グループでその動静は考古学論叢で把握できよう。第2は酒詰仲男が「貝塚に学ぶ」（昭和42年）で挙げた柴田常恵・田沢金吾・後藤守一の3名、第3は大正時代から多くの図集を刊行の杉山寿栄男だが、この時期の彼は目立たぬ。偶然、是川遺跡の遺物図集関連で、雑誌「ミネルヴァ」での喜田と山内の有名な論争は「山内清男と考古学」のコラム「山内清男と学史論争」で鈴木宏和氏が論じた。

【ミネルヴァの論争をめぐって】鈴木論文で同論争の経緯は明らかだが、鈴木は同年5月の松村瞭の急逝の影響

を見落とした。話を変えて、昭和37年、転勤後の私は、山内との雑談で雑誌ミネルヴァと『喜田博士追悼記念国史論集』が古書店頭には見当たらずと洩らし、後日、双方を譲られた。喜田の話題は諸兄と同様の範囲を伺ったのみ。伊東は自身の退官時の最終講義でミネルヴァ論争の不存在論の別刷も頂戴し、これら後述する。

11年5月に松村は事故で急逝。人類学教室で八幡・甲野は松村と親しく、松村は京大グループ濱田と昵懇であった。その松村の事故死は、人類学教室の運営への松村の影響の払拭で、大正13年の鳥居退職後の教室の迷走に終止符を打ち、抜本的な改革期の到来を予期させた。同時に、甲野のミネルヴァの編集も6月号の松村の訃報で大きく変わる。

昭和11年の論争に先立ち喜田の体調の変化が始まる。昭和6年に彼は還暦、翌年に京大で盛大な記念祝賀式、翌々年は「還暦記念六十年の回顧」の出版、心身とも順調と思われた。9年7月の北海道樺太の視察旅行も当初は順調に推移と思われたが、体調が崩れ、仙台に帰ると研究は続けるも余暇は秋保温泉で静養。翌年春に帰京され、直腸癌との診断で手術し、8月に幸い退院された。先生はその後、新たな課題へ次々と興味が沸くが、著作整理の仕事はとかく怠り勝ちとなられた（「喜田貞吉先生小伝」『喜田博士追悼記念国史論集』昭和17年）。しかも、大学側は11年度には出勤を見込んだが、博士は在京のまま。新学期を迎えて、旧制第2高校で教鞭をとる伊東が、東北大学の博士の講義の穴埋めでも奔走の日々。伊東は新任の2高の講義、東北大学の博士の講義の対策で、ミネルヴァの博士の情報や、記事対策の暇も無かつたろう。創刊号から5冊目の6月号から北海道樺太の視察旅行を話題に博士・伊東・三上次男・馬場修と創刊号座談会常連との3回の掲載、2回目までは博士の小論文を圧縮羅列、最終回文末に、博士が青森県小川原沼沿岸の遺跡の縄紋晩期の壺の底部が袋状三脚一隔底の類似例で大陸の真似と指摘して、この論争を締め括り、ミネルヴァの論争は喜田自身が幕引きをした。

伊東はその35年後、昭和46年1月の東北大学での最終講義で「東北古代文化の研究—私の考古学研究」の中で、東北日本の先史時代以降の最新の情報を紹介され、この論争の介在の余地は全く無い、喜田は極端な例と論じられている。

なお、杉山寿栄男は明治18年東京生まれで、14歳で印刷局で働き、かつ、印刷関係の技術の学校で学び、自営を開始し、かつ、印刷の営業と、自身の研究目的も兼ねて高橋健自（博物館勤務）の自宅を訪ねて指導を受ける（明治40年）。大正元年、考古学会に入会。同15年人類学会に入会。昭和7年、喜田の「日本石器時代植物性遺物図録」の刊行に協力。ミネルヴァの論争当時、喜田・杉山ともに未刊部分を残し、喜田は同14年、杉山は21年に逝去（藤沼邦彦・小山有希「原始工芸・アイヌ工芸の研究者としての杉山寿栄男（小伝）」『東北歴史資料館研究紀要23巻』平成9年）、杉山はその経歴から後藤に近い発想であったろう。

その時期以後を視野に入れると杉山は「日本原始繊維工芸史（中）原始編」を昭和17年に刊行し、縄紋・弥生時代の資料を集成し、後藤も「先史時代の考古学」を昭和18年に刊行。なお、後藤を中心に雑誌「考古学」を「古代文化」と改題、短期間刊行した。

雑 纂

長谷部言人著「先史学研究」と「北日本の縄紋遺跡群」

「山内清男の考古学」の冒頭の会津八一記念博物館肥田館長は「ごあいさつ」で「北海道・北東北の縄紋遺跡群」に言及。これらの遺跡群で中核の大遺跡が青森県の三内丸山・亀ヶ岡・是川の3遺跡です。山内を東北大学に迎えた長谷部は昭和2年に「先史学研究」を刊行。文中「円筒土器文化」では三内丸山遺跡の時期の土器を国内で始めて秩序立てて論じた。同様にまた亀ヶ岡・是川両遺跡の土器は、宮城松島の里浜貝塚や岩手大船渡の大洞貝塚で発

掘・報告の時期一東北地方の晩期の大洞式土器で、大洞式土器研究の第一歩も同書で踏み出した。しかも、大正14年以降は山内が参加と明記する。北海道・北東北の縄紋遺跡群研究の口火の「先史学研究」をまず紹介する。

現在の研究では、北海道全域で、本州やそれ以南の地域の縄紋・弥生文化に並行期の土器と指摘される土器が全部、出揃ってはいない。北海道のある地域では土器を使わない集団の活動の可能性の有無をまず実地で把握が急務である。

「画龍点睛」以後

「画龍点睛」図版15多摩考古学研究会の講演の写真が発端で、雑誌「多摩考古」37・38号に山内・佐藤講演録「無土器文化と縄紋文化の年代（1・2）」が上梓された。

その発端は上記の写真の追跡で、中島宏がまず写真のネガは梶国男、講演テープは佐々木蔵之助、それぞれ所蔵者を把握し、テープからの原稿起こしは中島の担当、栗原文蔵も種々関係という。

別に、滝澤浩の東京都茂呂遺跡発掘の朝日新聞東京版、昭和26年7月16日夕刊の紙面複写と、彼の一連の研究が「滝澤浩文庫目録」民史研究資料館（同文庫目録第2冊）に集録され、同時に同氏の諸論考も収録された。

伊東信雄の古代国家論の流布と山内

伊東は早く昭和10年5月に「古代に於ける国家の発達」（『文化』2巻5号）を発表し、矢島栄一が伊東論文の長文の書評を同年8月『歴史学研究』4巻4号に発表。伊東論文は当時刊行中の平凡社『世界史大系』12日本史第1編の田名網宏の論文に取り入れられた（拙稿「伊東先生と日本古代国家論」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』平成2年）。私は晩年の伊東から関係論文のコピー一括を偶然譲られて拙稿を纏めたが、伊東・矢島両人の繋がりには全く不明であった。偶然、奈良国立文化財研究所の山内文庫で矢島資料一括を披見の機会があった。矢島は昭和9年に一遺跡の古墳時代の土器などの論文を八幡の指導で『考古学雑誌』に発表。当時、在京の山内と八幡とは頻りに接触し、伊東論文が10年5月に雑誌掲載ののち、伊東は書評の執筆者を山内へ相談し、八幡が論文指導の矢島は如何かと山内は伊東へ。山内・八幡を通じて矢島に伊東論文が届くと、早速、矢島は長文で辛辣な書評を執筆し8月刊行の『歴史学研究』に掲載。その年の11月、矢島は突然発病。翌11年10月、26歳で彼は逝去。短命な研究者と研究者群像を紹介。

両尖匕首を起点に

昭和47年、山内の没後刊行の論文集新5集の両尖匕首には私の地域の資料も含み、平成16年に「福島考古」44号で類例を紹介した。当時強調を避けたが、山形県押出遺跡の多様な形の類例はその時期の社会で好まれた証拠であろう。「押出遺跡」（同県立うきたむ風土記の丘考古資料館刊行、平成19年刊）で石器・木器・漆器・編物など多様な遺物が知られ、浮島式土器（東関東）や若狭鳥浜遺跡の発見例と一連の彩漆土器などの発見は興味深く、その一方で、東北北半の円筒式土器との交渉が不明瞭なことも興味深い。

なお、浮島式土器は茨城県南部中心に分布の土器で地文に貝殻文、同時期の九州の轟C・D式・深浦式（南九州）の土器の貝殻文との関係は無視できない。後続の中期初頭の太平洋岸は伊豆七島、日本海岸は富山県まで、竹崎・鷹島型式群土器が広がることを考えれば、前段階の貝殻文土器の遠隔地間の分布は一層興味深い。

縄紋中期の東日本の立体的文様の土器

山内が解説の富山県朝日貝塚発見の深鉢土器（新5集223頁XII）を、横山大観が大正末に観賞し、しばらく立

ち尽くして「たいしたものですね」と番人の甲野勇に一言。岡本太郎は同じ写真を縄紋土器論に掲載した（「縄文土器の話」で甲野が両者を紹介）。新潟県では火炎土器の発見。長野・群馬両県の一部での焼町式土器の発見。勝坂式土器は広く中部高地から南関東で発見する。恐らく特異な技能をもつ小集団が富山・新潟に渡来し、同地を足場に特色ある装飾の土器が出現し、各地に拡散した結果であろう。同時期に姫川流域産の硬玉や、本州周辺産のタカラガイの遠隔地間の交易も并存したろう。

なお、山内は論文「矢柄研磨器について」の付表で縄紋中期の開始を1300BCとした（昭和43年）、偶然、管見に入った岡村秀典の「中国文明農業と礼制の考古学」Xiiiの新石器・殷周時代の文化編年の殷墟の古さは1300BCよりもさらに新しい年代である、両者に年代差はあろうが、近似の年代は確かである。

アジア大陸と日本

長年、期待の福井県桑野遺跡の報告書が平成31年に刊行され、興味深い資料の詳細が判明した。そして中国黒竜江省の遺跡の玉造技法との関連が論じられ、関連遺跡は同国内蒙古・遼寧省、ロシア沿海州と広域的に分布し、日本国内と国外の関連遺跡の時期の議論の決着が期待される。これには藤田富士夫の教示がある。

その後、北海道の一部と東北部では円筒土器文化が縄紋中期前半まで継続した。縄紋前期の東北南半より以南・以西の日本列島は恐らく地域ごとに別の動向を示した筈で、山形県押出遺跡で触れた多様な状況の一端に注目した。続く顕著な動向が、東日本の立体的文様の土器で、それらの背景の最も重要な動向を最後に紹介する。

縄紋中期初頭の竹崎・鷹島型群土器（太平洋岸は伊豆七島、日本海岸は富山県、より以西に分布）の底面は五角形で各頂点が突出、この器形の祖形は二里頭文化の甌—三本足の湯沸かしの鬲とその上の蒸し器を結合した器形が原形で、竹崎・鷹島型群土器の器形は特徴的な底部を除けば、キャリパー形甕に近く、縄紋の条が縦走の例がある。そして、中国・四国地方のこの時期の遺跡から、かつて山内が異形磨石斧と注目の石斧を伴う。中国で同種の石斧が前世紀後半に発見の二里頭文化とともに出現し、揚子江の江口付近の殷文化初頭段階から日本の縄紋中期初頭の西日本の石斧に影響したと目下推測する。

山内と田中美知太郎、その学問と人生

山内・田中は偶然、明治43年、早稲田小学校に同時に転校し、以後、親しく交際を続けた。その後、まず山内が東大で人類学を学び、田中は上智大を中退し、京大で哲学を学ぶが、ともに選科生の特異な学歴。その二人は戦後、山内は21年9月に東大人類学教室講師に就任。翌22年に田中は京大哲学教室助教授に就任、25年に文学部教授に昇進した。それ以前、山内は足かけ10年間東北大副手、18年年末～20年年末、戦時中の手不足から東北大解剖助手。山内家は19年7月から27年7月まで仙台で以前借りた昌繁寺の小屋で疎開生活。田中は法政大学講師2年間、その後、昭和5年から東京文理科大学（のちの筑波大学）教官、戦後に京大でギリシア哲学を講義。東大人類学教室の長年学生不在の特異な歴史は前述した。大正15年に考古学の造詣が深いスウェーデン皇太子の来日は人類学教室改善の好機であったが、鳥居助教授の長期出張中に画策の関係者の悪意の工作で、変則的な教室運営がさらに10年以上も長引いた。

山内への田中の回想・追悼は、田中美知太郎全集第13巻、交友録から「山内清男君のこと」（初出、『日本経済新聞』昭和37年3月9日）、山内清男と私（初出、築地書館、日本考古学選集21『山内清男集』集報11、昭和49年刊行）の2編で知られる。別に同全集第15巻の巻頭随筆補遺、仙台で考えたこと（初出、『芸芸春秋』第63巻8

号、昭和60年8月刊行)は「画龍点睛」に収録、文章の冒頭で山内から聞いた仙台の印象を記し、末尾で彼を述懐。田中は最晩年でなお山内は思い出す。

さて、山内・田中の二人は丘浅次郎の「人類進化論」の講演を東大人類学教室で聞いた。山内はむしろ生物学に興味を抱き、ダウイン説・メンデル説等々を小学生時代から友人達と話合った。他方で田中も丘著「進化論講話」に感銘した記憶はあるが、人の一生に決定的に影響を及ぼすものとは言い切れないと田中は「青年時代の読書」で述べた。山内・田中のその頃の遍歴は、田中の全集13巻の「大正時代の思想遍歴」4～6章で辿れるようだ。次に二人の人生・研究をごく短く紹介する。

〔**山内の研究**〕山内は足かけ10年間の東北大副手以後、昭和12年に雑誌「先史考古学」を創刊、縄紋土器編年表と、日本先史時代の抜歯風習の地域・年代の変遷を論じ、先史文化研究の現段階を紹介した。実は大正末年のスウェーデン皇太子訪日に際し、東大で人類学にこだわり、考古学を軽視した人物が、昭和11年5月に急逝。偶然、往時の京大関係者は外遊に出発する。東大人類学教室に先史学講座を開講させ、学生募集の突破口作りを目的の山内は同誌を発刊、先史考古学の現段階を強調。八幡が先史考古学の講師に、学生募集も14年度から開始。八幡は後年、民族学研究所に移籍し、終戦直前、出張先の旧満州、安東—現在の丹東に残留。昭和21年10月同地の在留邦人全員への退去命令で八幡も海路仁川経由で帰国。戦後すぐに民族学研究所は解散と聞く。それは兎も角、13年に長谷部が東大教授で赴任。山内は昭和14～16年に関東地方の縄紋土器の型式別図譜全12集を刊行、図譜各集の帙に会津先生の染筆の「日本先史土器図譜」の題箋。

戦後の東大人類学教室は開講を急ぎ、山内を講師に迎える。しかも、戦時中の人類学教室の蔵書疎開の為に土器破片を収めた平箱をその荷箱に転用し、格納の土器破片は研究室などに野積みで放置。その後始末も山内が担当し、多くの出所不明の資料が発生するも決着した。山内が開拓・推進した全国の先史土器の編年変化の追及も、幸い山内の没後も研究成果の蓄積が継続している。

〔**京大哲学と田中美知太郎**〕哲学書と全く無縁の筆者だが、偶然、入手した熊野純彦編著「日本哲学小史」(中公新書、平成21年刊行)の記述で、わが国の近代哲学で最初の独創的思考は西田幾太郎とともに成立し、西田のものと一群の個性の集まり、京都学派が成立。その西田は昭和20年6月7日に他界。

そして、京大でギリシア哲学を学び、以後、一貫してその立場を固持した田中が母校京大へ招聘された昭和22年が京都学派の終焉と同書は言う。第2次大戦中の京大哲学と当時の政権の関係は同書でも触れている。当然、戦地から復員し復学した学生達が、哲学を改めて受講したろう。実は、20年5月25日の東京空襲で、田中は焼夷爆弾の油脂を真正面から浴び、顔面から右手の大火傷を負い、なお教壇に立ち続けた。考古学関係でも山内・佐原の2人の面会は確実だが、その火傷を筆者は同書で始めて知った。田中は京大で渾身の講義を続けた。